

あると言へる。かくして分別を超えて無分別の立場に立つて中道を証し得るのであつて、こゝに衆生も仏と「なり得る」と言ふことができる。

然し衆生は繭中の蚕の如く、煩惱につままれて仏性あるも之を知見することが出来ない。仏性を知見するには、善法の因縁を俟たねばならないが、その善法を待ち欲するものは何か、これ衆生の仏性であるのである。衆生の仏性は、自らの本性を顯現しようとする欲求をもつのであつて、この仏性本然の力用の存する限り、善法を不斷に相續して、ついに阿耨菩提を得て仏果を証し得るのである、この力用を、大涅槃經は「未來仏性力

妙法華經に見られる

文体上の特色

野村耀昌

現存する漢訳の法華經が正法華、妙法華、添品の三種であることは言を俟たぬが、此等三者の間には夫々異同があり、添品の序によれば、正法華は貝多羅葉梵本と類似し、妙法華は龜茲國所藏の梵本と同断である旨が記されて居り、添品の訳者鳩多等は于闐國王宮所藏の梵本を底本とし前記二訳をも照合して此

「といひ、これを分別して「阿耨菩提中道の種子」と言ふのであるが、この種子こそ、やがて仏果を實らせる衆生の智慧である。

かくして罪障は、仏性論においてその消滅への論理的根拠が與へられたのであるが、仏教が印度他宗教の唱へる動力因と質料因と止揚して、独特な種子説を開拓して仏性論を展開し、よく凡夫の罪障を消滅してその成仏への根拠を明らかにし得たのは、他の宗教の及び得ざる処であらう。(終)

れを作製せりと称して居る。而も彼は言を進めて正法華の遺漏多きことを指摘すると共に、一面に於て什訳妙本にあつては正法華に見らるる如き遺漏なきを讃えて居るが、それと共に、妙品には藥草喻品の半ばと、富樓那及法師品の初め、提婆品、普門品偈等を訳出せざるは惜しむべき落手なりと断じて居る故に、什訳當時の妙本が現行の妙法華とは相当異同多きものであつた事を推知し得る。その一々の比較考証は紙幅なき本稿に於ては許容し難きものである故、此処にはその概観を示すのみに止めるが、正本は總じて十卷より成り、各品の呼称も妙本とは全く異なるに對し、添品は各品の配列は正本並に梵本によれるものの如く妙本との間にや、逕庭があるが、その訳文は概ね妙本

の文言を襲用して居り、偶々その足らざる個所を補足せるものであるに過ぎぬ。

筆者は此処に自我偈を一例としてその文体上の相違を論じたと思ふ。

梵本に於て二十三偈を形成せる壽量品偈を漢訳するに当り、正法華が正確に四字八句を用ひてその一々の偈を訳して居るに對し、妙法華は一般に五字四句を以て之を翻じ、時として六句末文は八句を用ひてその意を漢訳して居る。故に一見して正法華の訳文は整然として眼に映するが、これを仔細に檢出すればその翻訳に於て妙法華の文が如何に正法華よりも當を得たものであるかは直ちに明かである。即ちその第一偈を對比して示せば、

(正) 不可思議、億百千劫、欲得限量、莫能知數、得佛已來
至尊大道、常講說經、未曾休懈。

妙) 自我得佛來、所經諸劫數、無量百千萬、億載阿僧祇。

その内容に於て大同小異である一偈を漢訳した右の二句について見ても、その表現に於て妙本が正本に比して極めて簡にして要を得たものであることは明白である。然してその最大の原因と目せられることは、妙本が五字句を用ひ正本が四字句を用ひた点にある。元來四字句は主として素朴なる感覺を盛るに適し、五字句は複雑乃至流麗なる文体に屬して居るが、法華全卷

を通じて訳出されて居る偈文を比較検討するに、兩者共に四字偈、五字偈を併用して居ることは同様であるが、正法華にあつては時として平板なる叙述に五字を用ひ、複雑なる内容を有する偈文に對して四字を用ひる等、斯る考慮を拂ふことなく訳出して居るに對して、妙法華は常にその内容を吟味し、文体を弁別して、最も之に相應する語句を用ひて居る。これ妙本が一読直ちに共感と呼ぶに係らず正本が晦澁なる文体なりと感ぜられる所以である。

更に、妙法華にあつて最も顯著なるは鼻音 n の音韻を有る字の使用が極めて妥當なることである。即ち、正本にあつては平仄に關して一應の考慮ある如くであるが、斯る注意は全く省みられないのに對し、妙本にあつては、文の内容より見て強調さるべき個所と思はれるところには必ず n の音韻を反復使用して居る。(例、我此土安穩、天人常充滿、園林諸堂閣、種々寶莊嚴)更に又、文の末尾に於て明確に之を斷ずる要あるときは同じく此の音韻を以て終結せしめて居る。(例、速成就佛身)これ又、妙本が音韻するに當つて明快なる感と呼ぶ所以である。斯る周到なる配慮が独り妙本のみあつて正本に見当らない理由は、一に正本が竺法護一人の努力によつて訳出せられたるに反し、妙本は碩學羅什を中心として當時の優秀なる中国學者が長安に來集し、その一々の文を訳するに當つても此等諸學者の協議する所であつたことが最も大なる原因となつたのであら

う。又、添品が妙本の訳文を襲用したのは、偏へに妙本の文体が周到精緻、然も流麗にして至らざるなき名訳であつたために更に屋上架屋の愚を演ずるを嫌つた故であらう。三訳を存しつつも独り妙本のみが、中国にあつても、又本邦に於ても、一代を風靡して今日に到つた理由の一斑として、その訳文が上の如く最高の粹を示せるものであることは銘記されねばなら

教義と教学

芹 澤 寛 哉

従來本宗に於て「教学」と称せられていたものが果して学としての教学であつたか否かを方法論的に吟味することによつて「学としての教学」の在り方を考察することがこの小論の意図である。

古來宗学の立場は宗祖の依経不依人の立場を基本として、少しも私見を交えず、たと經文に任せて、説いたものであつて、これは學問の立場と異なるのは勿論であつた。反之天台の立場は、五時八教等の範疇（自己の哲學的見解）を中心として法華經乃至一代聖教を体系的に組織したものと考えられるから、それは一つの完結した學問体系と云うことが出来よう。しかし全く私見をたてないで學問を組織するということは元來不可能で

ぬ。

因みに言ふ。本宗の祈禱肝文は妙本中よりその最も強調されたる句を抜粋して之を再編せるものなるが故に、当然の歸結として文中に口音韻を反復すること極めて多く、誦誦によるその発声上の効果が、信仰者をしてより以上に心氣の高揚を齎らしめる結果を生ずること多き文体となつて居る。

あるのみならず、却つて最も強い積極的立場を示すこともあり得る。

教学とは教義を材料としてそれを學問的方法によつて組織体系化したものであるならば、かゝる學問は何故に必要であるか、その組織体系化はいかなる方法によつて可能であるか又如何なる論理的性格をもつべきであらうか、果して教義の盡くを組織しつくすことが出来るであらうか、これらの課題は一宗の教義が單なる信仰内容の告白であるに止まるとなく客觀的に妥當なるものとして、内には宗教の弁証として、外には護教的役割を強めるためにも、解決されなければならぬものであると思ふ。

右の課題に関する手掛りとしてキリスト教神學の立場を考察する。

キリスト教の歴史に就て見るならば、信仰が最初のまゝの單純な信頼感に止まらず、高められて確信となり、更に反省され